はじめに

梶 原 義 実　　名古屋大学大学院文学研究科　教育研究推進室

本年報『メタプティヒアカ』は，本号で記念すべき第10号となります。文学研究科では，平成18年度に「魅力ある大学院教育」イニシアティブに「人文学フィールドワーカー養成プログラム」が採択されたことを機に，教育研究推進室を設置し，文学部・文学研究科における教育の組織化と高度化に継続的に取り組んできました。その取り組みの具体的内容については，本年報のバックナンバーをご覧いただきたく思いますが，本年度のあらたな取り組みとして特筆すべきは，文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センターからの経費により創設された，海外の学会で研究発表をおこなう博士後期課程の大学院生に対して渡航費の補助をおこなう「海外渡航助成費」プログラムが開始されたことです。本年度は初年度にもかかわらず，6 件もの応募がありまして，そのすべてが優れた研究発表であると判断いたしまして，6 件すべてを採択いたしました。しかしながら様々な手続き上の課題も指摘されておりまして，今後はさらなる周知と制度の改良につとめていきたいと思います。

大学院生のフィールド調査に対する支援である「フィールドワーク調査実習プロジェクト」についても継続しておこなっており，本年度は 8 件の応募に対して 6 件のプロジェクト（国内 3 件，海外 3 件）を採択いたしました。例年のことではありますが，考古学や美術史学，文化人類学等，フィールドワーク的な色彩の濃い分野だけでなく，哲学系や文学系の大学院生も多く応募，採択されており，このプロジェクトが文学研究科全体で広く周知され，活用されている様子がみてとれます。これらの成果に関しましては，本年報にその概要を掲載するとともに，一部の成果につきましては，プロジェクト報告会として口頭報告の機会も設けております。

大学院生支援とともに，本年度のもう一つの特記すべき試みとしては，TA に関する説明会を開催したことです。文学研究科における TA のあり方につきましては，幅広い学問分野とそれに応じた多様な授業形態の中で，これまでは各個の先生や研究室に，その運用が一任されてきておりました。しかしながら，TA を真の意味で，大学院生が教育活動に携わった経歴として評価されるようになることを主眼として，推進室ではその設置以来，TA の問題に継続的に取り組んでまいりました。本年度は TA 採用者に，説明会への参加を基本的に義務づけることで，他の研究室では TA がどのような仕事をおこなっているかを，相互比較的に TA 自身に認識してもらうことにいたしました。この試みが TA の有効活用に一石を投じることができましたら幸いです。

大学院生へ向けての施策を手厚くおこなってきた一方で，推進室としてこれまで積極的におこなってきた，教員向けの FD に関しましては，本年度は手薄になってしまいました。来年度は教員向け FD の充実を図るとともに，多くの先生方がご参加いただき，積極的に議論にお加わりいただけるような方向性を模索していきたく思っております。